

新語の生成と意味変容について

—環境問題に関する新語の分析と考察—

平 林 あゆ子

はじめに

私たちは、新しい発見、新しい事物や対象に遭遇する時、それらの新たな名づけが必要となる。この現実には私たちは、まったく新しい語形を作り出したり、既存の語やその組み合わせを新しい意味で用いる方法や、外国語を意識して新語をつくったり、外国語を音訳や直訳 (loan translation) による方法で用いることにより、対処している。

本研究の目指すところは、この新しいことばの意味用法が、言語共同体において安定するまでの変容過程を明らかにするために、新聞というメディアにおける用例を手がかりとして考察することにある。

新聞というメディアを研究材料に使用する理由は、それが広範な読者層を対象とするメディアであり、私たちの社会の中であって代表的標本としてふさわしいからである。また新聞は、毎日発行されているので、語の意味変化を最も敏感に反映する。つまり新聞は私たちの言語共同体の中であって、新語の意味変容を反映する鏡として有効に機能し、当該課題の探究にとって、貴重な資料を提供するのである。

本稿では環境問題という領域に含まれる外来の新語を研究対象とする。環境問題が深刻化し、人類は絶滅の危機に直面していると言われるが、そのような深刻な問題の解決を迫られている時に、多くの新しい概念が導入され、そこにたくさんの新語 (外来語・翻訳語を含む) の生成が見られるからである。それらの新語は、外界の事物や人間の考え方・感じ方など、時代に伴う変化をより敏感に反映し、意味の変容がより明確に観察されると思われるからである。

外来語が何故どのように生まれ、使われるようになるかという、外来語の生

態に関する研究については、石綿敏雄が「外来語論議が盛んな割には、この種の問題は解明されていない。しかし外来語の諸問題を解決するためには、この種の問題の研究は不可欠であると思われる。……ただ今のところまだ、研究の方法が十分明らかになっているわけではない。それすら、これから積み上げてゆくよりほかないのである。」⁽¹⁾と述べているように、まだ未解明の分野である。したがって本研究はその研究領域に対して接近していくための試行的研究として位置づけられる。

調査対象の新語には、『環境白書（総説）』、『現代用語の基礎知識』⁽²⁾（以下『基礎知識』と記す。）、『朝日現代用語・知恵蔵』⁽³⁾（以下『知恵蔵』と記す。）に収録されており、更に生活に身近な環境問題に関する外来の新語（外来語・翻訳語）であることを条件に、本稿では、英語に由来するカタカナ語「コンポスト」と翻訳借用（loan translation）⁽⁴⁾による翻訳語として「地球にやさしい」、「環境にやさしい」を紹介する。

まず、これらの外来の新語について、辞典類（国語辞典⁽⁵⁾、英和辞典⁽⁶⁾、外来語辞典⁽⁷⁾）で意味の様相をおさえる。新聞は、産業経済記事を扱う代表的な新聞である『日本経済新聞』（1975-93）（以下『日経』と記す。）と、一般紙の代表と考えられる『朝日新聞』（1985-93）（以下『朝日』とす。『朝日』についてはデータベースの記事が85年以降しか得られなかった。）を使用する。そして、これらの新語が使用されている記事の用例を手がかりとし、調査期間における新語の初出から定着の過程での記事での扱い、使用頻度や提示形式、提示の際の説明内容にみられる変異および変化を次のような指標から検討し考察する。

- 1) 新聞記事の中で、意味が一般によく知られていない新しい語が使用される時、何らかの方法で言い替えの説明が付与される。
- 2) その新しい語の意味が、熟知されるようになるにしたがって、何らかの方法での言い替えの説明は不要になり、漸次記事から省略される。
- 3) その語の意味の曖昧さと不安定さが、説明を必要とする期間に、その説明内容の変異および変化として現われる。

1. 「コンポスト」について

1.1. 辞典類による新語の意味の説明

「コンポスト」は、5の注であげた現代の代表的な国語中辞典において、『辞林21』のみに記載があり、「【compost】[堆肥の意] 都市ごみや下水汚泥などを発酵腐熟させた肥料。」となっている。『基本外来語辞典』では、「コンポスト【英 compost】堆肥。」である。『基礎知識』ではコンポースト (compost) と記され、意味は「堆肥」となっている。これらから「コンポスト」の中心的意味は堆肥である。また、原語の英語compostは6の注にあげた代表的な英和辞典『リーダーズ英和辞典』には「しっくい；配合土,培養土；堆肥,コンポスト；混合物」と意味が記されていて、コンポストと堆肥は並列されており、言い替えの関係になっている。

しかし最近の新聞報道において、自治体が補助金を提供して話題となっている「コンポスト」とは、生ゴミ処理容器のことを指している。「コンポスト」の意味は、私たちの言語共同体において、ゆれを示していると考えられる。

1.2. 『日経』(75—93) および『朝日』(85—93) における記事数

二紙において記事数を調査し、表1、図1とする。78年が初出なので、78年から記す。

表1、図1で、中後半、85年以降の両紙において、『朝日』の記事数の急激な増加が特徴としてうかがえる。『朝日』において、90年代に顕著な増加を

表1 「コンポスト」年別記事数

年	78年	79年	80年	81年	82年	83年	84年	85年	86年	87年	88年	89年	90年	91年	92年	93年	計
日経	23	9	14	6	7	11	5	8	4	0	1	1	4	3	5	6	108
朝日								1	0	0	1	2	16	23	43	34	120

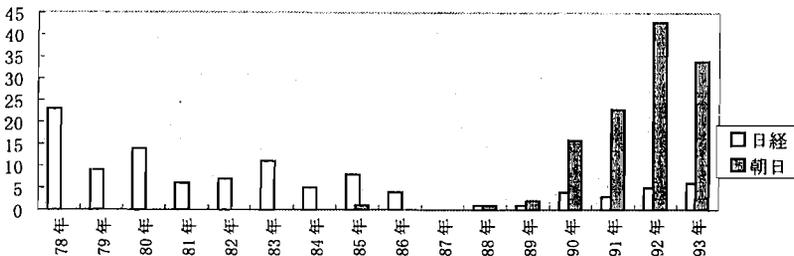


図1 「コンポスト」年別記事数

示しているのは、生ゴミの減量化と資源化がリサイクルの一環として、各家庭、自治体等に注目されてきたことと一致する。

『日経』では78年に23件という多くを数えるが、当時、産業経済界からは「コンポスト」が経済に結びつくもの⁽⁸⁾として注目され、農林省、厚生省との共同研究や自治体からの受注も目立ち、「コンポスト」は経済界が導入したと考えられる。この大型のコンポスト化装置は、東京都においても「コンポストセンター」で使用され、可燃ごみのうちごく一部は「コンポストセンター」へ送られ、有機肥料として製品化してきたが、効率の悪さから、94年以降はコンポストセンターは廃止されたという。そのような大型のコンポスト化装置の停滞傾向が記事件数に反映されており、大型のコンポスト化の減少傾向を物語っている。一方、90年以降では、『日経』の記事件数は『朝日』の一般世論（各家庭での生ゴミの減量化のためのコンポスト化）に牽引されるような形で増加をみている。

1.3. ことばの誕生と定着過程の背景

「コンポスト」は、『リサイクルキーワード』では、「有機性廃棄物を高速でかつ大量に堆肥化する事」と定義され、更に「コンポスト化も一時は安価な化学肥料普及により姿を消したが、現代の農地の地力低下やごみ問題などの悪条件がコンポスト化を奨励し、技術を進歩させている」⁽⁹⁾と、微生物利用を有効利用した再資源化技術の代表として紹介している。「コンポスト」導入の背景として、農地の地力低下やごみ問題などの悪条件が挙げられる。

1.4. 提示形式と意味の変容過程

新語「コンポスト」導入時の指示物は、堆肥である。コンポストが定着過程に提示される時には、置き換える単語による説明や、文脈の中に言い換える説明を含んでおり、それらの変化が意味の変容に反映している。『日経』と『朝日』の提示形式と意味変容について検討する。『日経』については、各節および各記事例の末尾に「n」を付加し『朝日』については記号「a」を付加した。後の事例においても同様とする。

1.4 n. 『日経』

1.4.1 n. 言い替えについて

『日経』での「コンポスト」の提示には、「コンポスト（たい肥）」あるいは「有機たい肥（コンポスト）」、「コンポストプラント（高速たい肥化装置）」のような単語での言い替えが見られる。なお、「コンポスト」の言い替え（記事例1 n 下線部参照）は一貫して「たい肥」である。文脈の中の言い替え的説明（記事例2 n 下線部参照）は、対象となる廃棄物の種類や、形状、コンポスト化の方法などについて記されており、全体像をイメージ化できるような説明となっている。

コンポストの言い替え表現を記事例1 n～2 nで示す。（下線は筆者による。以下同じ。）

<記事例1 n>

78年1月9日朝刊

農林省は、53年度からまず四国でかん詰め、冷凍食品、水産加工、つけ物などを製造する食品加工産業から排出される汚泥をコンポスト（たい肥）とする再資源化に着手する。……汚泥にモミがらやおがくずなどの炭素搬体を加えてコンポストに変え園芸農家に販売しようというもの。

（なお、この記事は初出である。）

<記事例2 n>

90年7月25日夕刊

生ゴミをたい肥（コンポスト）に変えるコンポスト化容器への関心が高まってきた。もともとゴミ処理とは関係なかったが、ゴミ問題に悩む多くの自治体がここへきて、生ゴミ発生を減らす有力な方法として着目、購入の際に補助金まで出して家庭への普及に乗り出したためだ。……コンポスト化容器は、やや大きめのバケツを逆さにした形で、上にフタを付けただけの構造はいたって単純。この中に生ゴミや落ち葉など腐敗しやすいものをどンドン入れる。二十一三十センチの厚さになったら、その上に二―三センチ土をかける。すると水分は土に吸収され、残った有機質は土の中のバクテリアによって分解され有機肥料ができあがる。

1.4.2 n. 意味変容について

前述のように、「コンポスト」は、一環して文脈の中で「たい肥」に言い替えられており、それは堆肥を指している。「コンポスト」は産業経済界がコンポスト装置、コンポストプラントの様な大型の堆肥化装置において導入したことばで、導入当初はコンポスト化する対象は食品加工産業から排出される大量の汚泥や下水汚泥であった。しかし、後には主な「コンポスト」化の目的は変化し、コンポスト化する対象も記事例2 nにもみられるように、家庭の生ゴミが加わってきている。家庭向けのコンポスト化容器が登場したのは80年頃で、当初は園芸用や家庭菜園用などであったが、90年代になると、年々増える一方のゴミ処理に頭を抱える全国の自治体が、家庭から発生する生ゴミの減量化に役立つと注目し始め、単なる園芸用品から「環境用品」へ、にわかに変身した。90年代はコンポストの砂漠緑化活用のためのプラント建設などの記事（92年）も見られ、小型のコンポスト化容器と大型のコンポスト化装置のように両用で使用される「ことば」として指示的意味の拡張をみている。

1.4.3 n. 『日経』にみられる提示形式と意味の変容（まとめ）

- (1) 「コンポスト」の提示のされ方は、一貫して「たい肥」に言い替えられている。
- (2) 文脈の中の言い替え的説明は、対象となる廃棄物の種類や、形状、コンポスト化の方法などについて記されており、全体像をイメージ化できるような提示となっている。（記事例2 n後半の下線部）
- (3) 「コンポスト」化の目的は、導入当初は大型たい肥化装置によって食品加工産業から排出されるものの大量の販売用のたい肥化であった。80年頃より家庭向けのコンポスト化容器が登場し、園芸用や家庭菜園用などのたい肥化がみられ、90年代にはコンポスト化容器は、ゴミ減量化という目的のための環境用品としてのたい肥化に多様化し、コンポスト化の主な目的は変化した。
- (4) 現在「コンポスト」は私たちの社会にあって「生ゴミ処理」と共起関係にあり、「コンポスト化容器」が私たちに共有概念として連想させるものは、環境用品に属するものであり、内包のゆれをみている。

1.4 a. 『朝日』

1.4.1 a. 言い替えについて

『朝日』においては、「コンポスト」は初期（85年1月12日から5件）の記事（記事例3 a参照）では、たい肥、たい肥化を指して使用されており、単語での言い替えもたい肥や肥料となっている。6件目（90年4月15日）から「コンポスト」は容器を指しても使用され、次第に指示的意味が容器に収斂される記事（記事例4 a参照）が増加をみている。文脈の中の言い替える説明は、対象となる廃棄物の種類や、形状、たい肥化の方法などについて記述されており、全体像をイメージ化できるような説明となっているのは『日経』と同様である。

コンポストの言い替え表現を記事例3 a～5 aで示す。

<記事例3 a>（初期5件の部分記事）

(1)……山林労働者の不足で森づくりのネックになっていた下草刈りもしなくとも済み、緑の再生が容易になることでも注目されている。

汚泥は生活排水から出るものを使う。発酵させれば肥料（汚泥コンポスト）になる。85/1/12 a

(2)エコマークの第1次の審査対象として、生ごみのコンポスト化容器が挙げられる。88/7/23 a

(3)逗子市の資源再利用検討協議会（会長、小泉農一・日本リサイクル協会理事長）生ごみをたい肥として使えるようにする「コンポスト」の導入推進。生ごみの「コンポスト」については市は新年度から容器を提供。89/2/4 a

(4)「エコマーク」に追加される、「生ごみコンポスト（たい肥）化機器」
89/3/26 a

(5)都民アンケートでは、通知文書、許可文書について、気になる表現の一つとしては「（汚泥）コンポスト」が上位を占めた。90/1/27 a

上記の記事から明らかなことは、(2)と(4)は主にエコマークと共に使用されているが、決して容器自体を指してはいないこと、(3)については、指示物が曖昧であるが、たい肥化という意味で使用されていると考えられ、これも容器を指

してはいいないこと、(1)と(5)は同じ用法で、大がかりな農林業用肥料、たい肥を指していることである。

<記事例 4 a>

90年4月15日朝刊

生ゴミが たい肥に変身 コンポスト購入に補助

生ごみや落ち葉などをたい肥に変えてしまうコンポストを家庭に普及させようと、大和市は今年度から購入費の半額を補助する制度の実施を始めた。……コンポストの普及でゴミの減量につながるほか、運搬や焼却などの省エネルギーにも役立つ。……コンポストは中が空洞になっている合成樹脂製の円筒形容器。いわば、底の開いたバケツを逆さまにした形。使用方は、底を地中に5センチぐらい埋めるだけ。土のあるところならどこでも良い。……

これまで、多量の肥料を必要とする農家などで利用されていたが、環境や資源問題への関心の高まりから最近、脚光を浴びて来た。

1.4.2 a. 意味変容について

「コンポスト」の指示物は具体的に1.4.1 aの記事例において観察された。

表2 コンポストの指示物

年	85-89年	90年	91年	92年	93年
容器	0	13	18	25	18
たい肥, たい肥化	4	3	4	15	15

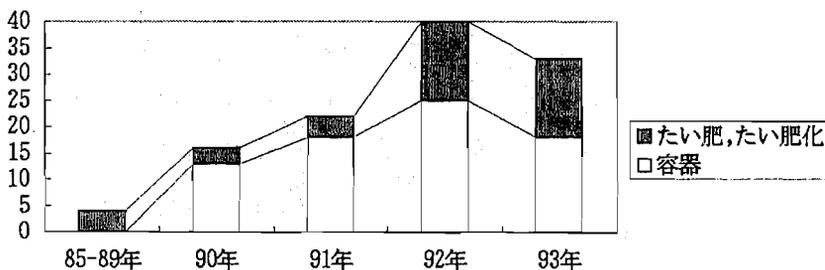


図2 コンポストの指示物

つぎに全体の記事の「コンポスト」の指示物を表2、図2に示す。

「コンポスト」の指示物は、表2と図2に示されているように、「コンポスト」の初期の記事の指すものは「たい肥」であったのが、「たい肥」であったり、「たい肥化」になり、更に「たい肥」、「たい肥化」以外に「容器」をも指すようになり、90年以降、容器を指す記事の増加をみている。このように「コンポスト」は、指示的意味の拡張をみている。

1.4.3 a. 『朝日』にみられる提示形式と意味の変容（まとめ）

- (1) 新語「コンポスト」の定着過程では、文脈の中に言い替え表現を含んでいるのは『日経』と同じ。
- (2) 新語「コンポスト」の単語による言い替えは、暫時変化し、指示物の変容していく過程がみられた。表2,図2参照
- (3) 新語「コンポスト」はつくられた内容からそれをつくる容器、道具に変化した。

たい肥 → 生ゴミ処理容器

- (4) 新語「コンポスト」の指示的意味は拡張をみた。 図2参照。

1.5. 「コンポスト」のまとめ

「コンポスト」は当初、農林業用肥料として専門用語であったが、自治体等がゴミの減量化を方策し、一般に普及させる過程で意味変容が生じたと結論づけられる。

- (1) 「コンポスト」はつくられた内容からそれをつくる容器に変化した。

たい肥 → 生ゴミ処理容器

- (2) 「コンポスト」の定着過程では、文脈の中に言い替え表現を含んでいる。その言い替えは単語によるものや、具体的な言い替え的説明による。

例：コンポスト（たい肥）、たい肥化容器（コンポスト）

コンポストはプラスチック製で、バケツの底を抜いて逆さにしたような容器。地面に5センチほど埋めて、中に台所の生ごみや落葉を入れると、土の中のバクテリアが分解して、たい肥にする。年間3—5トンの処理能力がある。（下線部分は言い替え）

『日経』、『朝日』の記事例参照。

(3) 現在「コンポスト」は私たちの社会にあって、「生ゴミ処理」と共起関係にあり、「コンポスト」は私たちの共有概念として連想させるものは、環境用品に属するものであり、園芸用品から環境用品への内包のゆれをみている。

(4) 新語「コンポスト」の指示的意味は拡張をみた。

「コンポスト」の言い替えが示すように、「たい肥」から「たい肥」,「たい肥化」→「たい肥」,「たい肥化」,「容器」に漸次、指示的意味の拡張をみたということがいえる。図2参照。

(5) 新語「コンポスト」の運用にあたって、たい肥（コンポスト）化の目的は、変容をみた。

新語「コンポスト」の導入時と現在では、その対象を囲む環境や周囲の条件が変化した場合、結果として違った意味付けを獲得することになる。（特に「コンポスト」を早くから導入した産業界の記事を含む『日経』で顕著に示されている。）

現在「大型たい肥化装置でのたい肥化」と「園芸用としてのたい肥化」,「ゴミ減量化のための環境用品としてのたい肥化」に多様化した。

(6) 新語は表現の短さを採用する。

「コンポスト」は「生ゴミ処理容器」や「たい肥化容器」は採用せず、短く表現できる「コンポスト」を採用する。

(7) 『日経』,『朝日』双方の関心事の違いがことばの指し示すものの違いとして現れる。

「コンポスト」は現在、『朝日』においては主に環境用品としての「生ゴミ処理容器」であり、『日経』においては大型コンポスト装置についての記事で開始された時の「たい肥」を指して現在も一貫して言い替えられている。

図1の記事件数の推移にみられるように、『朝日』と『日経』は対照的な記事件数を示しており、『日経』では、産業経済界の関心が大型のコンポスト装置にあり、70年代後半あたりの記事件数が最大となっている。「コンポスト」ということばを導入したのは産業経済界で、「コンポスト」の指すものは一貫して「たい肥」である。一方『朝日』での記事の顕著な増加は90年代である。その頃、都市ゴミの減量化と再資源化のために一般家庭に「コンポスト」ということばを「環境用品としてコンポスト（生ゴミ処理容器）の

補助金制とともに導入した自治体」についての記事が顕著になっている。一般紙としての世論づくりに関心のある『朝日』はそれらの自治体についての記事に「コンポスト」(生ゴミ処理容器など)「容器」を指して提示することになり、言語共同体での一般の人々の名付けを反映しながら、コンポストの指示物が容器に収斂していくことになったといえよう。

2. 「地球にやさしい」、「環境にやさしい」について

2.1 辞典類による新語の意味の説明

「地球にやさしい」、「環境にやさしい」は "earth friendly", "environmentally friendly"⁽⁴⁰⁾の翻訳借用 (loan translation) による翻訳語である。

"friendly"は『リーダーズ英和辞典』(1984)では、「友人らしい；親しい、友好的な；優しい、親切な；味方で、好意ある、歓迎する；しろうとにもわかりやすい、(扱いが)やさしい<説明, 機械>」の訳がある。やや新しい『ライトハウス英和辞典』第2版(1990)においては、意味内容の既述について大差はみられないが、反意語として hostile, unfriendly が掲載されている。最近出版の『ロングマン現代英英辞典』第3版(1995)には用例として "environmentally friendly" があり, "not damaging to the environment" の言い替えがみられるが、これは第2版(1987)には記載はなく、英語においても新しい用法である。これらから、環境に対して使用される訳としては、「味方の」「敵対しない」「きずつけない」が妥当と考えられる。

既述した一般によく使用される国語中辞典には「やさしい」は①おとなしくて好感もてる。②思いやりがあって親切だ。③優美だ。というおよそ三種の意味の説明がある。最近出版の『大辞林』第2版(1995), 『大辞泉』第1版(1995)において、上記の意味以外に語源や古い用法(恥ずかしい；つつましか；けなげである)の記述があるが、どちらにも「環境にやさしい」のような用例はない。それで地球や環境に適用される「やさしい」は、「②思いやりがあって親切だ。」という配慮を指す意味で使用されているのが、最も近いと推察される。

以上から、この「やさしい」は「敵対しない」、「きずつけない」、「思いやりがあって親切」という意味が近いと考えられる。

2.2 『朝日』および『日経』における記事件数

「地球にやさしい」が使用されている記事の総件数は『朝日』（1985—93）では217件（ただし85—88年はなし）で、『日経』では3件である⁽⁴⁾。また、「環境にやさしい」が使用されている記事の総件数は、『朝日』では55件（85—88年はなし）で、『日経』では1件である。「地球にやさしい」、「環境にやさしい」の『朝日』（1985—93）の年別記事件数を、初出89年から図示した図3、図4から、「地球にやさしい」は、91年から急激に記事件数の増加を見ている。これは、89年3月末に開始されたエコマークのテーマである「地球にやさしい」の影響である。一方、「環境にやさしい」は「地球にやさしい」を追いかけるような様相で92年から93年にかけて増加していることが、明らかである。『日経』

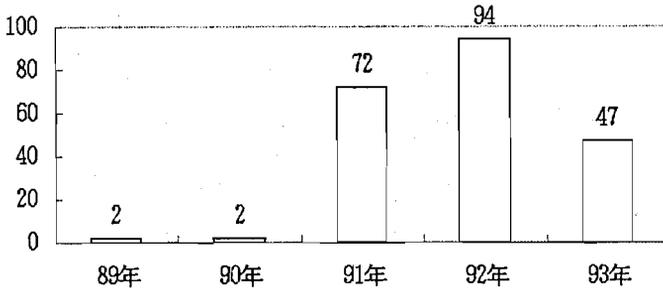


図3 「地球にやさしい」の年別記事件数

『日経』：総記事件数は3件。（初出：92年2月1日）（92年：1件、93年：2件）

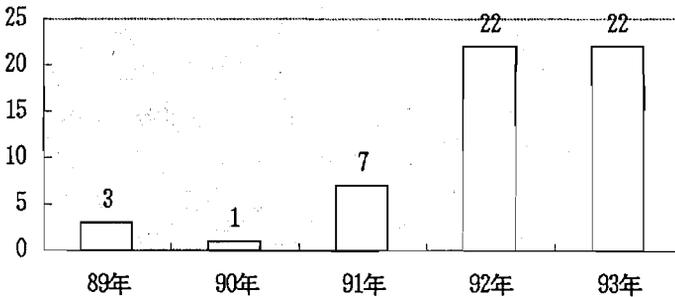


図4 「環境にやさしい」の年別記事件数

『日経』：1件（93年11月12日）『「環境にやさしい」商品——西友、独自に基準設定』という見出しの記事。

では、「地球にやさしい」、「環境にやさしい」の使用される記事は、ほとんど出現しない。したがって『朝日』の記事を使用して論じる。

2.3. ことばの誕生と定着過程の背景

「地球にやさしい」の初出は、89年1月31日で、エコマークについての記事であり、テーマである「ちきゅうにやさしい」の紹介記事である。また「地球にやさしい」というフレーズは、アメリカのベストセラーの翻訳『地球にやさしい生活術』⁽¹²⁾、『地球にやさしい99の知恵』⁽¹³⁾をはじめ、翻訳書ではない『地球にやさしいライフスタイル』⁽¹⁴⁾、『地球にやさしい暮らし方』⁽¹⁵⁾などに見られ、1990年代初期の出版界では、『地球にやさしい……』の題名が氾濫し始めている。「環境にやさしい」の初出記事（89年12月2日）もエコマークの紹介記事で、「環境にやさしい商品」という用法で掲載されている。

エコマークは、89年3月末に開始され、エコマークの初出の記事87年11月18日において『環境を汚さない商品です——という「お墨付き」』と紹介している。この「環境を汚さない商品」が89年12月2日には「環境にやさしい商品」という言い換え表現で使用され、「環境にやさしい」の初出がみられる。また『環境にやさしい暮らしの工夫』⁽¹⁶⁾『環境にやさしい暮らしのアイデア834+1』⁽¹⁷⁾などが相次いで出版され、89年から93年にかけて、出版界は「地球にやさしい」、「環境にやさしい」の大洪水であった。「地球にやさしい」、「環境にやさしい」はいずれもエコマークに伴って出現したことばであり、翻訳本等、出版物のタイトルも相互に影響しあいながら、登場し、定着してきたことばである。

2.4. 提示形式と意味の変容過程

人と人の中で使用されてきた「やさしい」が、環境や地球と共起関係で新しく使用され始めた。この「環境にやさしい」の定着過程における「やさしい」の主体や対象について「やさしい」の用法を検討する。

2.4 a. 『朝日』

2.4.1 a. 「環境にやさしい」の主体について

「環境にやさしい」の主体は、次の表3、図5のように当初、主に商品、具物であったが、不可算名詞である抽象的な概念を多くとるようになった。

初出は次の〈記事例 5 a〉(89年12月2日)で示すように、「粉せっけんに環境保護マーク 琵琶湖守る大津の運動に励み」という見出しでエコマークの紹介の記事の中に、「環境にやさしい」商品という使い方で用いられている。「環境にやさしい」がどのような文脈の中で使われているのか、55件の記事を分析してみると、出現初期の頃は初出の記事と同様に、主体は商品、具体物が使用されていたが、91年に入り次の〈記事例 6 a〉(不可算名詞の使用例)にみられるように次第に環境にやさしい-「企業行動」、「オリンピック」、「研究所」などの以外なものが主体として使われるようになってきた。

「環境にやさしい」の主体についての記事例を〈記事例 5 a～6 a〉で示す。

〈記事例 5 a〉

89年12月2日朝刊

「環境にやさしい」商品につけられる環境保護マーク（エコロジーマーク）が、琵琶湖を汚さない消費者の会（石井智幸代表世話人）が扱っている「マルダイ粉石けんびわ湖」に1日からつけられた。

（なおこの記事は初出である。）

〈記事例 6 a〉

91年4月23日夕刊

……環境庁が発足して20年になる節目の白書として「環境にやさしい経済社会への変革に向けて」の副題を掲げ、国内の環境問題と地球規模の環境問題の双方に同時対応できる新しい政策や行政の枠組みと、経済社会システムの変革を求めている。

図5のように92年以後、可算名詞（物、商品）に対してばかりでなく、むしろ不可算名詞（抽象的事物）に対して使用頻度が増加している。その使用例は、

表3 「環境にやさしい」の主体

年	89年	90年	91年	92年	93年
可算名詞（物，商品）	3	0	4	4	3
不可算名詞（抽象的事物）	0	2	4	23	19

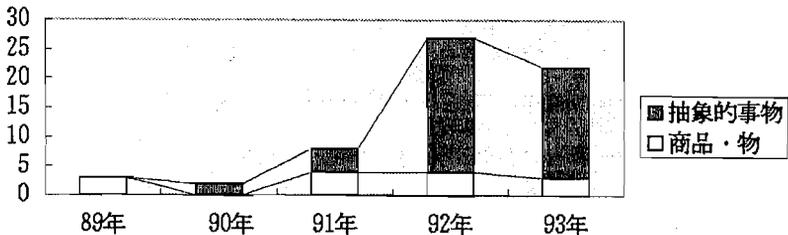


図5 「環境にやさしい」の主体

次のとおりである。主体を [] 内に掲げる。

- ・91年：環境にやさしい—[企業行動]，[交通運輸]，[経済社会]，[県民運動]
- ・92年：環境にやさしい—[県民運動]，[生活]，[産業設計]，[くらし方]，[買い物運動]，[建物]，[都市宣言]，[労働組合]，[企業行動指針]，[こと]，[ライフスタイル]など。
- ・93年：環境にやさしい—[自動車利用運動]，[政策]，[町づくり]，[こと]，[県民運動推進会議]，[農業]，[買い物運動]，[買い物]，[虫退治]，[行動]，[店]，[オリンピック]，[暮らし]，[生活]，[交通体系]など。

以上の調査により、「環境にやさしい」は、主体が物，商品のような具体物から不可算名詞（抽象的事物）に対し拡大使用されてきている。これらの主体は全て無生物で，人のくらしを囲む人為的事物であり，その共起関係も環境を汚染する可能性のあるあらゆる事物をとることが可能である。そのことが「環境にやさしい——」の「やさしい」の意味範囲を拡大し，具体的説明なしには意味の理解を困難にしている。

2.4.2 a. 言い替えについて

「環境にやさしい」の文脈の中における言い替えは、具体的例示を含んだ言い替え的説明や語句により、初出89年から91年には全ての記事において見られる。92年からはこの年の全記事22件の内17件の記事に、93年には全記事22件の内16件に言い替えがみられ、言い替えを伴わずに提示される記事も増加してきている。記事の中に「環境にやさしい」がどのような単語や句に言い替えられているかを表4、記事例7 a～9 aに示す。

表4 「環境にやさしい」の単語や句による言い替え

(具体的例示を含んだ言い替え的説明文は除く)

	言い替え語句
89年	「環境保護」2件
92年	「自然の理にかなった」、「環境によりよい」、「環境に配慮した」2件、 「環境保全」、「地球環境を考える」、「環境を守る」、「地球環境の保全」 「地球環境保全を念頭に置いた」、「省電力、省エネ」
93年	「自然保護」、「殺虫剤に頼らず退治する」、「化学肥料や農薬などを使わない」、「エネルギーを十数パーセント節約する」、「環境に配慮する」、「資源や環境への気づかい」、「ゆとりと豊かさが実感できる」、「エコ」

<言い替えの記事例> (下線部は環境にやさしいの言い替えを示す。)

<記事例7 a>

92年10月7日夕刊

環境庁の委託を受けて地球・人間環境フォーラム（岡崎洋理事長）が策定作業を続けていた「環境にやさしい企業行動指針」の内容が7日、固まった。企業に対して、環境に配慮した経営方針や行動計画の策定、事業活動に伴う環境影響評価（アセスメント）や環境監査の実施を提案している。

<記事例 8 a>

92年 4月29日朝刊

福岡市の桑原敬一市長は28日、「環境と開発に関する国連会議（地球サミット）」が行われる6月に、「環境にやさしい都市宣言」を行い、年内には市民ぐるみの行動計画を策定する方針を明らかにした。同市環境局は、「地球環境保全を念頭に置いた都市宣言は、全国でも初めてのものになるはず」と意気込みをみせている。

<記事例 9 a>

93年 3月 4日朝刊

「エコ・ユニオン（環境にやさしい労働組合）」

以上の言い替えの調査から、「環境にやさしい」の単語や句による言い替えは、決まった一定の言い替えはなく、「環境に配慮した」や「資源や環境への気づかいのある」という内容で言い替えられていることが分かる。その意味内容は文脈における具体的な言い替える説明なしには理解が難しい。

2.4.3 a. 意味用法の変容について

先に検討したように、「環境にやさしい」の初出は、「環境を汚さない商品」という表現を89年12月2日のエコマークについての記事で「環境にやさしい商品」と言い替えて登場する。すなわち「環境にやさしい」は環境を汚さないという意味で使用され始めた。「環境にやさしい」を含む記事が頻繁に出てくるに従って、その指示的意味は、「環境を汚染しない」のみならず言い替え表現にみられる「自然の理にかなった、環境に配慮した、資源や環境への気づかいのある」のように、意味範囲の拡張をみている。

2.4.2 a. の表4の示すように、「環境にやさしい」の固定した言い替えがみられないのは、「環境にやさしい」の意味内容の曖昧さや不安定さの反映であるが、2.4.1 a. の表3、図5、使用例にみられたように、「環境にやさしい」の主体が多様化される傾向にあるからでもある。

「……にやさしい」は「環境」や「地球」ばかりではなく、それ以外の語との共起関係が広がってきている。『朝日』(1985—1994/11)の見出しにおいて、「……にやさしい」の対象が「地球」や「環境」ではない用法は下記のとおりである。

・「胃にやさしいCDブック」 ⁽¹⁸⁾	90/02/11 (初出)
・新宿を「人にやさしい」都市へ	91/06/25
・「女性にやさしい都市」	93/02/26
・皮膚にやさしい繊維素材が人気	93/07/15
・障害者や高齢者向けにやさしい家電製品	93/11/12
・老後の体にやさしい住宅	94/06/28
・人にやさしい政治とは何か (声)	94/10/07
・「人に優しい」消費税への提案	94/10/20

以上の結果から「地球にやさしい」、「環境にやさしい」という用法は、「胃、人、女性、皮膚、障害者や高齢者、老後の体」などにもおよんできている。これは、人間の総称としての人や、年齢や性を意味特徴とする女性や高齢者、人間の体の部分の皮膚や胃など包摂関係⁽¹⁹⁾の語群に使用されてきているということである。この「やさしい」の用法は、従来の用法ではなく、文脈の中に大まかには「配慮した」という言い換えをもつ「地球にやさしい」、「環境にやさしい」の用法と同一である。新語「地球にやさしい」、「環境にやさしい」が導入されることにより日本語の従来の用法を新たに拡張していると言えよう。

先に、2.1.で、国語辞典での意味は「思いやりがあって親切だ。」という配慮を指す意味が近いとしたが、使用記事の中の文脈の中で検討した新語の意味内容は、より広い範囲を示している。新語の意味は提示される文脈の中で形成されていくことが観察される。

2.5. 「地球にやさしい」、「環境にやさしい」のまとめ

(1) 「地球にやさしい」、「環境にやさしい」は“earth friendly”, “environmentally friendly”の翻訳借用 (loan translation) による翻訳語である。翻訳借用による翻訳語は、形式的等価 (Formal Equivalence) が求められる翻訳で、既存の日本語で造語されているにも関わらず、具体的な意味の分かり

にくさが生じる。

- (2) 翻訳語が提示される時は、具体例を伴う言い替えや、句や単語での言い替えが文脈の中に多用される傾向があるが、時の経過と共に意味が熟知され安定し、言い替えは減少傾向をとる。
- (3) 「環境にやさしい」の一定した言い替えがみられないのは、翻訳借用による翻訳語である故の意味の理解の不十分さがあり、「やさしい」の対象が多様化される傾向にあり、指示的意味に揺れがあるからである。
- (4) 「やさしい」は人と人との関係の中で従来使用されてきた大和ことばであるが、地球や環境と共に起関係で使用されることが定着するに従い、「……にやさしい」は人に属するものにも使用され、「やさしい」と共起関係をもつ「ことば」は、増大した。これは「やさしい」の語彙素性の変更を意味し、「地球にやさしい」、「環境にやさしい」は従来の「やさしい」の用法に新たな拡張をみていると言えよう。

例：人と人との関係の「生徒にやさしい先生」の用法とは違う「身体にやさしい食品」、「胃にやさしいCDブック」などの用法の出現。

- (5) 「地球にやさしい、環境にやさしい」の主体は、可算名詞（具体物、商品）から不可算名詞（抽象的事物）に多様化され、不可算名詞（抽象的事物）の割合が大となってきている。

例：商品、自動車⇒・県民運動・都市宣言など。

- (6) 新語（翻訳語）の意味は提示される文脈の中で形成されていき、言語共同体で育まれ、古くから使用の「やさしい」の意味範囲を拡張させる。
- (7) 新語（翻訳語）の意味を国語辞典で探ることは困難である。国語辞典は、常に従来の用法の指示的意味に引きずられる。

3. 結果と考察

新しいことばが誕生する過程では、外来の事物や概念を既存のことばによる造語として「地球にやさしい」、「環境にやさしい」のような翻訳借用や、外国語を音訳した「コンポスト」のような現象とが見られる。この現象は対象とする外来のものを外国語の音で表現するか日本語で表現するかのコインの表裏をなすような現象である。翻訳借用による翻訳語は、形式的等価 (Formal Equivalence) が求められる翻訳で、既存の日本語で造語されているにも関わらず、

具体的な意味の分かりにくさが生じるし、ほとんどそのままの音形で採り入れられる音訳においては更に意味の曖昧さ、不明瞭さが生じる。しかし、その名付けはどちらも、その言語共同体の環境危機の解決のために新鮮な感じを印象づけ、魅力的でなければならなかったということが反映されていると考えられる。しかし、その造語について“compost”に「コンポスト」が採用され、翻訳語での造語がされなかった理由や“environmentally friendly”にカタカナ語の音訳をとらなかった理由については今後の課題として残されている。

本稿で採りあげた例「コンポスト」の意味は、つくられる内容（たい肥）からそれをつくる容器への変化をみている。これは、音訳ゆえの意味不明瞭さもその変化の一因と考えられるが、最初に経済界が「コンポスト」を導入した頃の状態と、最近の環境問題への認識など周囲の条件の変化があり、いわばそのことばの背景の変化（大型のコンポスト装置から各家庭でのコンポスト容器の普及のような）が、「コンポスト」の意味を変化させる要因ともなっていると考えられる。それは、環境危機の解決のために一般の人々に使用されるにあたって、カタカナ語の新鮮な魅力が備わっていて、しかも「生ゴミたい肥化容器」という意味理解は可能であっても長い表現ではなく、短く表現できる「コンポスト」が採用されるようになってきたと考えられる。そして新語は新鮮で魅力的な故に使用されると考えられ、言語共同体で生まれ、提示される文脈の中でその意味は、形成されていくことが観察された。

本稿では、この言語共同体と深く関わりをもつ新聞というメディアにおける用例を手がかりとして、環境問題という領域に含まれる新語の意味が、日本語の言語共同体に安定するまでの変容過程を明らかにするために、その新語の含まれる記事を初出から時系列に従って丹念に追い、その言い替えを捉え、統計的に分析し考察した。

結果、新語が定着過程において提示される時には、何らかの説明が付与される。その説明は言い替え（置き換え的な単語による説明や、句での説明や具体例を伴いながらの説明）を含んでいる。

また、新語が提示される時は、初期には言い替えが多用される傾向があるが、時の経過と共に減少傾向をとり、その変化（既存語の言い替えの消失）が語の意味の定着度を反映していたり、その言い換えの単語の変異が、その新語の意味の不安定さを反映している。例えば新語に既存語の単語での言い換えの説明

がとれてくることは、その社会で、その語が受容され、意味の理解も安定してきているという事実の反映なのである。またコンポストが「たい肥」や「たい肥化容器」、「生ゴミ処理容器」など色々な言い替えを併記して提示されることは、新語の意味の不安定さを反映していると考えられる。

また、新語が導入されることにより、既存の語の意味分野に新たな意味特徴を付加し指示的意味の拡張をみていることも観察された。例えば、翻訳語の「地球にやさしい」、「環境にやさしい」の例のように、これらの語が導入されることにより、日本語の言語共同体に馴染み熟した大和ことば「やさしい」という形容詞の意味分野に新たな意味を付加し、指示的意味の拡張をみている。従来、人と人との関係で使用されてきた「やさしい」は「身体にやさしい食品」、「胃にやさしいCDブック」などのように主体が無生物をとり対象も人以外に人に属す胃や身体のような包摂関係にある語をとるようになった。つまり「やさしい」の語彙素性の変化をみたということである。このように、新語の提示される文脈の中で既存のことば「やさしい」の意味範囲を拡張させる。

以上考察してきたように、外来の新語が導入される際におこることは、既成の世界に対して、新しい捉え方が提供されるということである。その新しい捉え方は、自らの文化の反映する枠組みの中で組み替えられ、新しい固有の意味をもつような捉え方であった。それ故、もともとの外国語の意味や外国の概念とは、大幅に違っていたりするのは当然である。それが借用語 (loan word) の宿命でもある。借りた「ことば」は、自らの都合でどのようにでも使いこなすことになる。

ここで採り上げた新語に、つくられる内容からそれをつくる容器に意味の変化をみた「コンポスト」のようなことばがみられた。「コンポスト」は定着過程の初期には「たい肥」という意味で、英語での中心的意味の「たい肥」であった。それが後には、生ゴミ処理容器に変容した。このような外来語で、原語では内容であったものが定着過程で、それをいれる容器になった例に、「ポスト "post"」がある。原語で「郵便、郵便物」の意味が、日本では「ポスト」というと、街角の赤い「郵便ポスト」を指す。また「アイロン "iron"」も "iron" (鉄、鉄器具) から、意味の限定変容したことばである。

このように、新語が導入された初期の意味と現在もっている意味の差異が現れることは、過去にも例の在ることで、決して特殊なことではない。ここに採

り上げた外来の新語は、西洋の言語体系に位置付けられていることばを切りとって、異なる文化体系の中に位置付け、その交互作用により、独自な変化を呈し、日本語の言語共同体に定着して帰化した「ことば」ということなのである。

注)

- (1) 石綿敏雄『日本語のなかの外国語』（岩波書店、1985）71頁。
- (2) 深川章編集『現代用語の基礎知識』（自由国民社、1994年）
- (3) 山本信編集『朝日現代用語 知恵蔵』（朝日新聞社、1994年）
- (4) 新しい事物・概念を導入する時、それを表現するために外国語の語句の要素を字義どおり一つ一つ翻訳して新しい語句を生み出す方法。
- (5) 金田一京助 監修：『三省堂国語辞典』（三省堂、1982年第三版、1992年第四版）
松村明、他監修：『辞林21』（三省堂、1993年）
西尾実、他編『岩波国語辞典』（岩波書店、1979年第三版、1986年第四版、1994年、第五版）
- (6) 松田徳一郎監修『リーダーズ英和辞典』（研究社、1984年）
竹林滋、他編『ライトハウス英和辞典』（研究社、1990年、第2版）
- (7) 石綿敏雄編『基本外来語辞典』（東京堂出版、1990年）
- (8) 食品加工業から排出されるものから大型コンポスト装置で堆肥を大量に製造し農家に販売
- (9) 財団法人 クリーン・ジャパン・センター編 『リサイクルキーワード』、(財団法人 経済調査会、1993)、126頁。
- (10) 世界最初のエコマークはドイツ(1978年に制定)で、それに記されていることばでもある。ドイツ語大辞典 DER GROSS DUDEN BAND1 (1973)に、"umweltfreundlich" (環境にやさしい) が初出している。
- (11) 『日経』(75-93)における「地球にやさしい」、「環境にやさしい」が殆ど出現しない理由は不明。データベースの語句の切り方によるものとも考えられる。
- (12) シーモア・ジョン・ジラード・ハーバード(霧田栄作監訳)：『地球にやさしい生活術』(TBS ブリタニカ、1990)
- (13) アース・ウォッチャー・グループ編：『地球にやさしい99の知恵』、(日新報道、1991)
- (14) (財)環境情報普及センター編：『地球にやさしいライフスタイル』、(第一法規出版、1990)
- (15) 上野景平、『地球にやさしい暮らし方』、(講談社、1991)
- (16) 環境庁編：『環境にやさしい暮らしの工夫』、(大蔵省印刷局、1989)
- (17) 京都生活協同組合編：『環境にやさしい暮らしのアイデア834+1』、(かもがわ出版、1991)

- (18) 製薬会社の製品でストレス解消のためのCDブック
- (19) ユージン A. ナイダ (升川潔他訳)『意味の構造——成分分析』(研究社, 1977), 76—87頁。

参考文献

- (1) 鈴木孝夫『ことばと文化』(岩波書店, 1973)
- (2) 池上嘉彦『意味論』(大修館書店, 1975)
- (3) 柳父章『翻訳とはなにか』(法政大学出版局, 1976)
- (4) ユージン A. ナイダ (升川潔 他訳)『意味の構造—成分分析』(研究社, 1977)
- (5) Lyons, J. (1977). Semantics: Cambridge University Press.
- (6) 柳父章『翻訳語成立事情』(岩波書店, 1982)
- (7) 田中克彦『言語学とは何か』(岩波書店, 1993)
- (8) 池上嘉彦, 山中桂一, 唐須教光『文化記号論』(講談社, 1995)